縄文土器底部に見られる網代圧痕の素材検討

國井　秀紀

1　はじめに

網代圧痕とは、縄文土器製作時に土器の底に敷いた編組製品（註1）の痕跡である。筆者は、平成23～24年度にまほろんで実施した指定文化財展「ふくしまの重要文化財Ⅸ　三島町荒屋敷遺跡～只見川流域の縄文の匠たち～」の担当として、写真1の縄文時代晩期末葉のカゴ（註2）を取り扱った際、カゴ素材の表面にタケ・ササ類の節や細かい繊維の筋が確認できたため、編組製品の素材についての知識があれば、その判断ができるのではないかと考えるようになった。

本稿では、現在の編組製品と網代圧痕から得た情報をもとに、製作した編組製品による実験から、当時の素材について検討する。

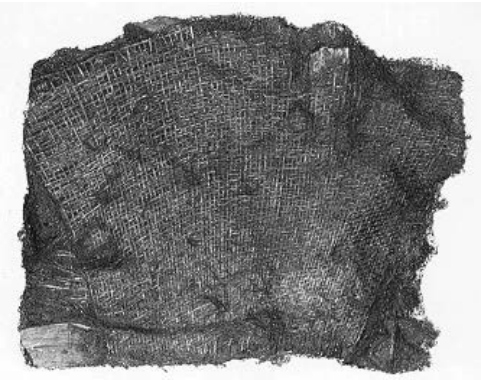


写真１　荒屋敷遺跡出土のカゴ

2　現在の編組製品

網代圧痕に見られる編組技法は、縄文時代から現在まで受け継がれている。ここでは、網代圧痕の参考として、福島県内の代表的な編組製品13点を観察する。製品については、表１－１～12の三島町や喜多方市などの会津地域で製作されたカゴ類を三島町生活工芸館で閲覧し（註3）、表１－13の南相馬市小高区で製作された箕については、まほろんで確認した（註4）。

①ヤマブドウ　手提げカゴ（網代編み）
②クルミ　手提げカゴ（網代編み）
③マタタビ　手提げカゴ（網代編み）
④マタタビ　手提げカゴ（ござ目編み）
⑤マタタビ　カゴ（網代・とびござ目編み）
⑥ネマガリダケ　大カゴ（網代・ござ目編み）
⑦アケビ　手提げカゴ（ござ目編み）
⑧アヅマザサ+フジ　箕（ござ目編み）

写真２　福島県内の編組製品

表１　福島県内の編組製品の観察

No.	素材名	製品名	編組技法			素材					資料写真
			底部(編み)	体部(編み)	○本潜り、○本越え	幅(mm)	厚さ(mm)	単位	断面形	使用部分	
1	ヤマブドウ	手提げカゴ	網代	網代	2本潜り2本越え	6	1	1本		内皮	写真2－①
2	ヤマブドウ	手提げカゴ	網代	網代	2本潜り2本越え	6～8	1～1.2	1本			写真3－①
3	クルミ	手提げカゴ	網代	網代	2本潜り2本越え	6～8	0.9	1本		外皮	写真2－②、写真3－③
4	クルミ	手提げカゴ	網代	網代	2本潜り1本越え	5	0.9	1本			写真3－②
5	マタタビ	手提げカゴ	網代	網代	4本潜り4本越え	4	0.7	2本		内皮	写真2－③、写真3－④
6	マタタビ	手提げカゴ	ござ目	ござ目	2本潜り2本越え(底部ヨコ) 4本潜り4本越え(底部タテ) 2本潜り2本越え(体部ヨコ) 1本潜り1本越え(体部タテ)	3	0.5	2本 4本 1本 2本			写真2－④、写真3－⑥ 写真2－④、写真3－⑥ 写真2－④、写真3－⑤ 写真2－④、写真3－⑤
7	マタタビ	カゴ	網代	とびござ目	4本潜り4本越え(底部) 2本潜り2本越え(体部)	3.5	0.5	2本 1本		内皮	写真2－⑤ 写真2－⑤、写真3－⑦
8	マタタビ	くずカゴ	網代	木目ござ目	2本潜り2本越え(底部) 2本潜り2本越え(体部)	3.5	0.5	2本 1本		内皮	 写真2－⑧
9	マタタビ	カゴ	四つ目	ござ目	2本潜り2本越え(底部) 2本潜り2本越え(体部ヨコ) 1本潜り1本越え(体部タテ)	3.5	0.5～0.6	2本 1本 2本		内皮	写真2－⑨
10	ネマガリダケ	大カゴ	網代	ござ目	6本潜り6本越え(底部) 2本潜り2本越え(体部ヨコ) 1本潜り1本越え(体部タテ)	6～7	1～1.2	2本 1本 2本		外皮	写真2－⑥、写真3－⑩ 写真3－⑪・⑫ 写真3－⑪・⑫
11	ネマガリダケ	カゴ	六つ目	六つ目	1本潜り2本越え	5～6	0.8	1本		外皮	写真3－⑬
12	アケビ	手提げカゴ	ござ目	ござ目	2本潜り2本越え(ヨコ) 1本潜り1本越え(タテ)	2	2	1本 2本		ツル	写真2－⑦、写真3－⑭
13	アヅマザサ フジ	箕	ござ目	―	1本潜り1本越え 1本潜り1本越え	4～5 16～20	0.8～0.9 0.3	1本 1本		外皮 内皮	写真2－⑧、写真3－⑮

※素材断面形(　:薄い平材,　:平材,　:半円材,　:円材)

（１）製品の特徴（写真２、表１）

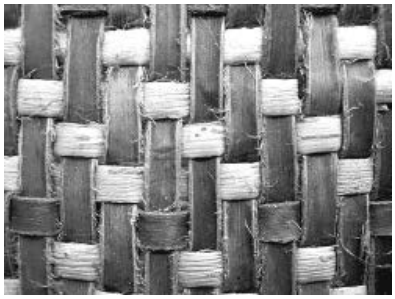
今回検討した 13 点の製品の観察から、形・編組技法・素材の違いが確認できた。まず、製品の形は、手提げカゴ、丸い形状のカゴ、ちり取り状の箕の３つに分けられる。このうち、最も多い手提げカゴの素材には、ヤマブドウ・クルミ・マタタビ・アケビが使用される。製品からは、編み目が密なものと粗いものなどの編組技法の違いが見られ、さらに製品を手に取ることで、製品の硬軟、素材の繊維の筋や節などが確認できた。これらの製品は、製作前に素材を水漬けし、軟らかくしてから製作するため、素材の硬軟を判断することは、乾燥した状態の完成品からは難しい。素材の硬軟については、筆者の経験 (註５) から判断すると、フジ・クルミ・ヤマブドウ・アケビを比較的軟質な素材とし、マタタビ・ネマガリダケ・アヅマザサを硬質の素材とみなすことができる。

（２）素材と編組技法の関係（写真２・３、表１）

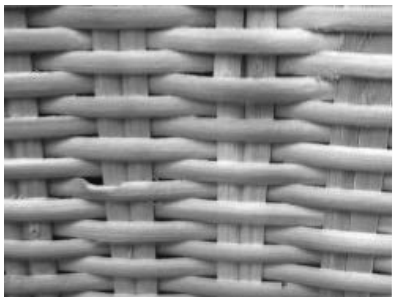
製品の編組技法 (註６) は、表１で示したように６種類確認されるが、その中で「網代編み」と「ござ目編み」が多い。その特徴として、編み目に隙間がない丈夫な編み方となる「網代編み」では、ヤマブドウやクルミの軟質な素材が製品全体に使用（写真２－①・②）され、マタタビやネマガリダケなどの硬質な素材がカゴの底部に使用される（写真３－④・⑩）。また、編み目が粗くなる「ござ目編み」では、マタタビやネマガリダケなどの硬質な素材がカゴの胴部などに使用（写真３－⑤・⑪・⑫）され、軟質な蔓を使用するアケビは、製品の全体に使用される（写真３－⑭）。このように、編組製品からは、素材によって編組技法が違うことがわかる。さらに、これまで述べた編組製品は、タテ・ヨコに同じ素材を使用するが、タテとヨコ

①ヤマブドウ　カゴ底・体部（網代編み）

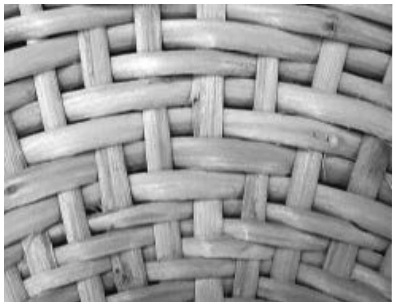
②クルミ　カゴ底・体部（網代編み）

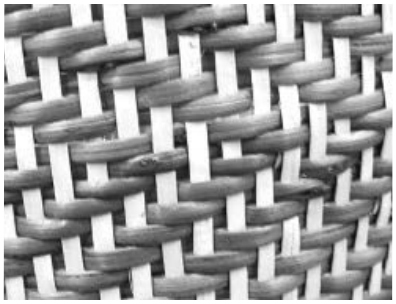

③クルミ　カゴ底・体部（網代編み）

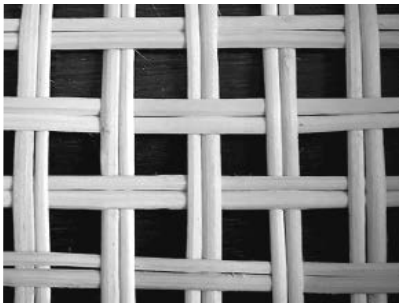
④マタタビ　カゴ底部（網代編み）

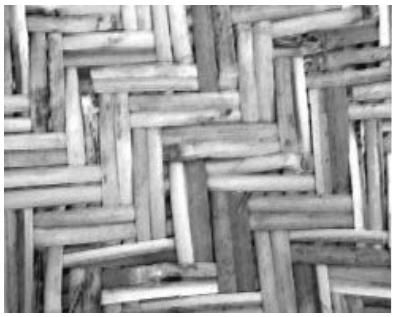

⑤マタタビ　カゴ体部（ござ目編み）

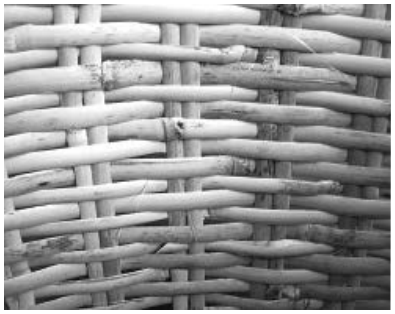
⑥マタタビ　カゴ底部（ござ目編み）

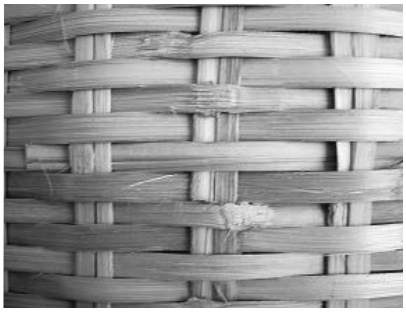

⑦マタタビ　カゴ体部（とびござ目編み）


⑧マタタビ　カゴ体部（木目ござ目編み）


⑨マタタビ　カゴ底部（四ッ目編み）


⑩ネガマリダケ　カゴ底部（網代編み）


⑪ネガマリダケ　カゴ体部（ござ目編み）


⑫ネガマリダケ　カゴ体部（ござ目編み）

⑬ネガマリダケ　カゴ底・体部（六ッ目編み）

⑭アケビ　カゴ底・体部（ござ目編み）

⑮アヅマザサ・フジ　箕底部（ござ目編み）

写真３　現在の編組技法

素材を変えた例として箕（写真３－⑮）が挙げられる。これは同素材で編んだ場合に、編み目が粗くなる「ござ目編み」で製作するが、軟質と硬質の素材を使用するため、逆に編み目が密になる。

この他、編組製品の厚みは、素材の厚みや表１に示した素材の断面形（表１参照）、編組技法の違いにより異なる。特に、製品に厚みがでるものとして、アケビのように円材を使用し、編み目が粗くなる「ござ目編み」の製品（写真３－⑭）では、その表面の凹凸が最も大きくなる。また、クルミのように軟質な平材を使用し、編み目に隙間がない「網代編み」の製品（写真３－②）では、表面の凹凸が小さくなる。

（３）素材の表面に見られる特徴（写真３、表１）

冒頭で述べたように、筆者が縄文時代のカゴの素材を判断できるのではないかと考えた理由は、写真１のカゴに素材の節と内面の細かい繊維筋が認められたからである。縄文時代のカゴ類の研究からは、素材としてタケ・ササ類が最も多く使用されていたことが確認されている(註7)。ここでは、現在の編組製品の素材に見られる節と繊維の筋を確認する。

ヤマブドウの内皮の両側には、少しネジレが入るが、細かい筋と節が認められる（写真３－①）。クルミの外皮の外側には、粗い筋がわずかに認められるが、内側には筋が認められない（写真３－②・③）。マタタビの内皮の外側には筋や節が認められるが、あまり目立たない（写真３－④・⑥）。ササ類であるネマガリダケとアヅマザサには、外側が滑らかで、一段高くなる節が見られる（写真３－⑪・⑬・⑮）。また、内側には真っ直ぐな細かい筋と少しネジレのある節部分の筋が認められる（写真３－⑫）。アケビの表面に見られる高まりは、節ではなく、芽や根をカットした部分がある（写真３－⑭）。フジの内皮の両側には、繊維の筋が認められ、また繊維の毛羽立ちも目立つ。このように、素材の中で節と繊維の筋がハッキリと見られるのはササ類のネマガリダケとアヅマザサだけである。

３　網代圧痕と製作した編組製品の圧痕

（１）網代圧痕の調査（写真４、表２）

調査では、まほろん収蔵の資料の一部を取り上げる。なお、表２の素材計測値については、網代圧痕が土器の焼成により本来よりも約 20%収縮すること(註8)を考慮していただきたい。

網代圧痕には、底部の全面にその痕跡が見られるものが多いが、この他に写真４－①～③に示した圧痕が認められる。①は、土器製作時に敷いた編組製品から、土器を何度か離したため網代圧痕の重複(註9)ができたものである。次の②は、片側に編み途中の端部が確認されたものである。このような例として、本稿に掲載していない磐梯町法正尻遺跡の図 750 － 5(註10)、郡山市荒小路遺跡の図 47 － 2 号埋甕(註11)などがある。これらは、編み途中の両端から編み幅が認められるもので、その幅は前者が 10 ㎝、後者が 15 ㎝である。また、③は、異なる２種類の編組製品を合わせたもので、合わせ目と編み目の方向が一致し、③上部の「ござ目編み」のタテ芯材を下部の「網代編み」の網目に入れてつなぎ合せている。このため、網代圧痕

表２　網代圧痕一覧

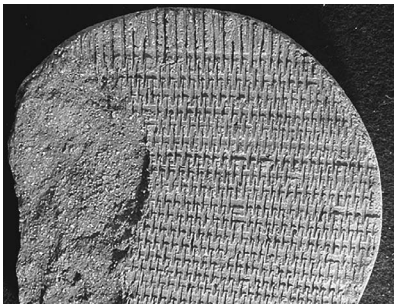
No.	遺跡名	図番号	時　期	編組技法	編み方 ○本潜り○本越え	素材 幅(mm)	厚さ(mm)	単位	断面	表面の痕跡	特徴的な圧痕、写真番号等
1	仲ノ縄B	41 - 1	前期後葉	ござ目	1本潜り1本越え	4～5		1本		細かい筋	写真4－⑥・⑫　(註12)
2	仲ノ縄B	41 - 2	前期後葉	網代	2本潜り2本越え	6～8		1本			
3	仲ノ縄B	41 - 3	前期後葉	とびござ目	2本潜り2本越え	3		1本		滑らか	
4	仲ノ縄B	41 - 4	前期後葉	ござ目	1本潜り1本越え	4		1本			
5	仲ノ縄B	41 - 5	前期後葉	とびござ目	2本潜り2本越え	3～4		1本		細かい筋	合せ編組製品、写真4－③
				網代	2本潜り2本越え	7～9	0.4	1本		太い筋	
6	仲ノ縄B	41 - 6	前期後葉	とびござ目	2本潜り2本越え	3		1本		滑らか	合せ編組製品
				網代	2本潜り2本越え	12		1本			
7	仲ノ縄B	41 - 7	前期後葉	網代	2本潜り2本越え	10	0.8	1本		滑らか	
8	仲ノ縄B	41 - 8	前期後葉	網代	2本潜り2本越え	11～12	0.5	1本		太い筋	
9	仲ノ縄B	41 - 9	前期後葉	網代	2本潜り2本越え	7～8	0.8	1本			
10	本町西A	48 - 13	前期後葉	網代	2本潜り2本越え	8	0.4	2本		太い筋	(註13)
11	本町西A	48 - 14	前期後葉	ござ目	1本潜り1本越え	3～5		1本			
12	本町西A	48 - 16	前期後葉	ござ目	1本潜り1本越え	2～3		1本			
13	小池田1次	21 - 12	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	8	0.6	1本			(註14)
14	小池田1次	21 - 15	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	5～6	0.5	1本			
15	小池田1次	21 - 16	前期中～後葉	ござ目	1本潜り1本越え	3		1本		細かい筋	
16	小池田1次	21 - 17	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	5～7	0.3	1本		細かい筋	写真4－⑪
17	小池田1次	21 - 18	前期中～後葉	ござ目	1本潜り1本越え	3～4		1本		細かい筋	
18	小池田1次	21 - 19	前期中～後葉	ござ目	1本潜り1本越え	3～4		1本		細かい筋	
19	小池田1次	21 - 20	前期中～後葉	ござ目	1本潜り1本越え	4	0.6	1本			
20	小池田2次	9 - 8	前期中～後葉	ござ目	1本潜り1本越え	2		1本		細かい筋	圧痕重複、写真4－①
21	小池田2次	9 - 9	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	6～7	0.4	1本			
22	小池田2次	9 - 10	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	8～9	0.4	1本		太い筋	
23	石神	46 - 23	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	7～8	0.6	1本		太い筋	合せ編組製品、(註15)
24	石神	46 - 24	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	8～9	0.5	1本			
25	冑宮西	112 - 956	前期後葉	網代	2本潜り2本越え	5	0.3	2本			(註16)
26	冑宮西	112 - 957	前期後葉	網代	2本潜り2本越え	9～12	0.5	1本		太い筋	写真4－④
27	冑宮西	112 - 958	前期後葉	ござ目	1本潜り1本越え	3～5	0.5	1本		細かい筋	編み途中、写真4－⑮
28	柏久保	25 - 22	前期後葉	網代	2本潜り2本越え	5～7	0.4	1本			写真4－⑤、(註17)
29	羽白D1次	65 - 6	前期中～後葉	ござ目	1本潜り1本越え	4～5	0.9	1本		細かい筋	圧痕重複、写真4－⑬
30	羽白D1次	65 - 7	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	7～9	0.4	1本		太い筋	(註18)
31	羽白D2次	7 - 2	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	6～8	0.4	1本		太い筋	(註19)
32	羽白D2次	7 - 3	前期中～後葉	ござ目	1本潜り1本越え	4～5	0.9	1本		細かい筋	
33	羽白D2次	7 - 4	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	6～7	0.4	1本		太い筋	
34	羽白D2次	48 - 9	前期中～後葉	ござ目	1本潜り1本越え	4		1本		細かい筋	
35	羽白D2次	48 - 11	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	4～5	0.4	1本			
36	羽白D2次	48 - 13	前期中～後葉	網代	2本潜り2本越え	7～8	0.4	1本			
37	法正尻	784 - 5	中期	とびござ目	2本潜り2本越え	3	0.5	1本			写真4－⑭、(註20)
38	角間	99 - 15	後期中葉	ござ目	1本潜り1本越え	1	0.3	1本			(註21)
39	角間	99 - 16	後期中葉	ござ目	1本潜り1本越え	1	0.3	1本			写真4－⑦
40	角間	99 - 17	後期中葉	網代	2本潜り2本越え	7	0.4	1本			写真4－⑩
41	角間	99 - 18	後期中葉	網代	2本潜り2本越え	9～12	0.5	1本			写真4－⑨
42	角間	99 - 21	後期中葉	木目ござ目	3本潜り3本越え	1.5～2	0.3	1本			写真4－⑧
43	弓手原A	122 - 15	後期	ござ目	2本潜り2本越え	1.5	0.3	1本			写真4－②、(註22)

からは、土器底ほどの幅のものや異なる編組製品を合わせたものなども使用していたことが確認できる。

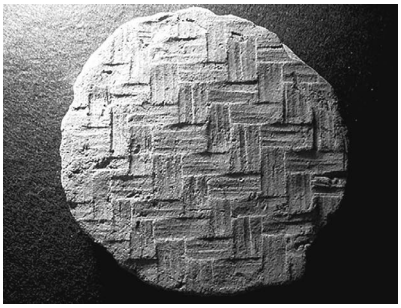
網代圧痕の編組技法には、現在の編組製品と同様に「網代編み」と「ござ目編み」が多く認められる。写真４－④・⑤の「網代編み」では、圧痕がハッキリするものとそうでないものがあるが、このような圧痕の違いは、素材の厚さによるものと考えられる。写真４－⑥・⑦の「ござ目編み」では、編み目が粗いものと細かいものがあるが、これらの違いは、素材の幅によるものである。

次に、写真４－⑨～⑮の網代圧痕の細部からは、それぞれの素材表面に見られる微細な痕跡や土器表面などの特徴が観察できる。⑨～⑪の「網代編み」では、軟質な幅広の素材を使用しているが、写真４－⑫～⑮の「ござ目編み」には、細くて硬質な素材を使用している。このため、現在の編組製品と同様に、素材によって編組技法が違うことが確認できる。さらに、圧痕の形状からは、素材の幅や素材表面の形状がわかる。このため、素材の断面形については表２に示した。それによると、⑬が丸味のある円材もしくは半円材、⑭・⑮が平材もしくは半円材の平らな部分を使用したと考えられる。また、素材の表面には、写真４－④・⑨～⑪・⑬に

①網代圧痕の重複
（小池田遺跡２次　9－8）


②編み途中の端部
（弓手原Ａ遺跡　122－2）

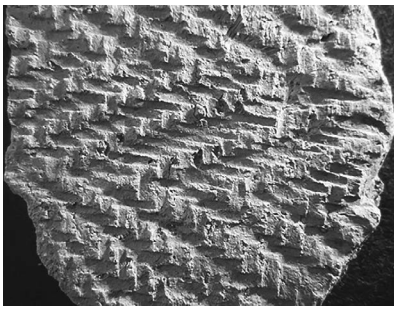
③合わせた編組製品
（仲ノ縄Ｂ遺跡　41－5）

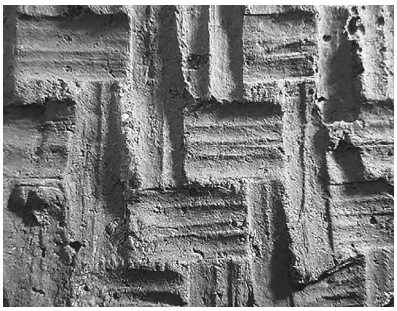

④網代編み
（胄宮西遺跡　122－957）

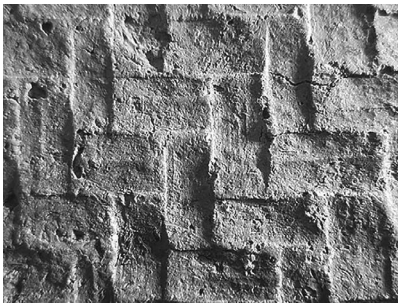
⑤網代編み
（柏久保遺跡　25－22）

⑥ござ目編み
（仲ノ縄Ｂ遺跡　41－1）

⑦ござ目編み
（角間遺跡　99－16）

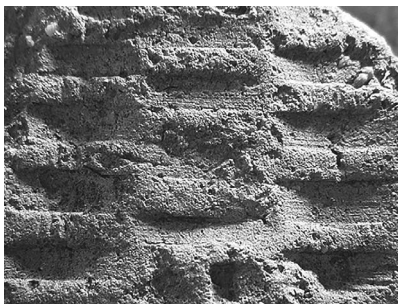

⑧木目ござ目編み
（角間遺跡　99－21）

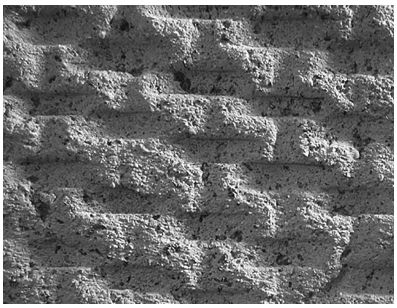

⑨素材の痕跡
（角間遺跡　99－18）


⑩素材の痕跡
（角間遺跡　99－17）

⑪素材の痕跡
（小池田遺跡１次　21－17）

⑫素材の痕跡
（仲ノ縄Ｂ遺跡　41－1）


⑬素材の痕跡
（羽白Ｄ遺跡１次　65－6）


⑭素材の痕跡
（法正尻遺跡　784－5）

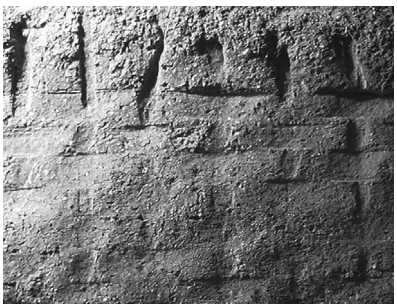

⑮幅が異なる素材
（胄宮西i遺跡　112－958）

写真４　網代圧痕

繊維の筋などの微細な痕跡が認められる。その特徴として、⑬にはハッキリした細かい繊維の筋、⑩・⑪には葉のような細い繊維の筋、④・⑨には太い筋が認められた。⑬については、写真３－⑫で観察したネマガリダケの繊維の筋に非常に似ていることから、タケ・ササ類と考えられる。また、⑮からはタテ・ヨコ材の太さの違いが確認できた。

（２）製作した編組製品の圧痕（写真５、表３）

ここでは、製作した編組製品を粘土に押し付け、編組製品からどのように圧痕が写るかを確認する。この編組製品については、網代圧痕で確認した素材の情報を確めるため、「網代編み」と「ござ目編み」の編組技法で、素材やその厚さなどを変えたものを５種類製作した。「網代編み」の素材には、軟質な素材のススキ皮・ススキ茎・フジ、「ござ目編み」では硬質な素材であるササ類のヤダケを使用した。また、製品の粘土押圧では、縄文土器製作時の乾きによる粘土の硬・軟の状態が想定されるため、種類ごとに押圧の強弱をつけた。

はじめに、写真５－①～③の「網代編み」による強い圧痕を見ると、①の薄手の素材では、粘土表面の凹凸がほとんどなく、逆に②の厚手の素材では、ハッキリとした凹凸が見られる。また、①～③の強い圧痕で見られる編み目の中の太い筋は、素材の繊維の筋ではなく素材の割れと判断できる。このような割れは、丸味のある素材を平らに伸ばしたためできたものである。続いて、写真５－④・⑤の「ござ目編み」では、④の素材に半円材の丸味部分、⑤の素材に半円材の平らな部分を使用した。このように同じ素材でありながら、素材表面の形により圧痕の窪みの形は、④では丸味が付き、⑤では平らになる。また、「強い・弱い圧痕」に見られる編み目の平面形では、④のように素材に円材もしくは半円材の丸み部分の使用で長楕円形、⑤のように平材もしくは半円材の平らな部分を使用することで長方形を呈する。

このように、強い圧痕の場合に限り、圧痕の凹凸から素材の厚さが、また編み目の平面形や断面形から素材の断面形が判断できる。さらに、編み目のタテ・ヨコ材が確認できるものからは、タテ・ヨコ材の交差部分にできた段差の計測から、素材の厚さを特定することができた。

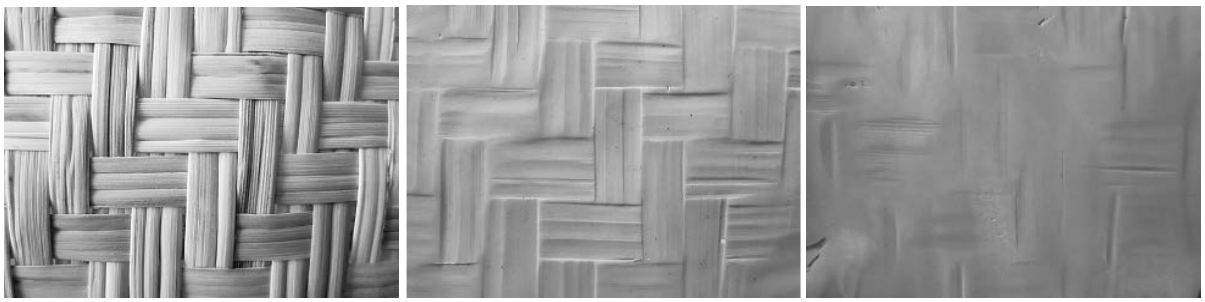
表３　製作した編組製品一覧

写真5 No.	網代名	押圧状態	網代表面の凹凸	編み目の形状	素材		備考
					厚さ(mm)	痕跡	
①	ススキ皮製網代編み	強 弱	小 小	長方形 長方形	0.2	太い筋	写真４－⑪に近似する
②	ススキ製網代編み	強 弱	大 小	隅丸長方形 隅丸長方形	1	太い筋	写真４－⑨に近似する
③	フジの内皮製網代編み	強 弱	大 小	長方形 長方形	0.4	細い筋 太い筋	写真４－⑩に近似する
④	ヤダケ外皮製ござ目編み（外）	強 弱	大 小	長楕円形 楕円形	1.0～1.2	滑らか	写真４－⑫に近似する
⑤	ヤダケ外皮製ござ目編み（内）	強 弱	大 小	長方形 長方形	1.0～1.2	細かい筋	写真４－⑬に近似する

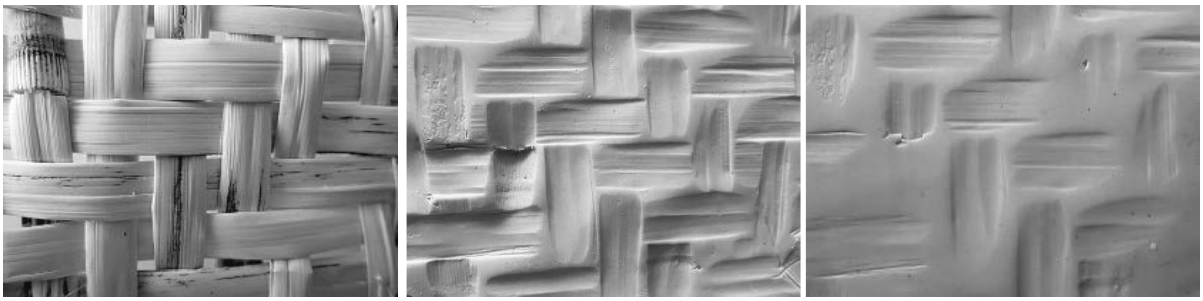
（３）網代圧痕の観察からわかったこと

本稿では、現在の編組製品と網代圧痕の調査、製作した編組製品とその製品の圧痕の状態から素材の情報を確認してきた。ここでは、これまでに分かった素材の特徴についてまとめる。

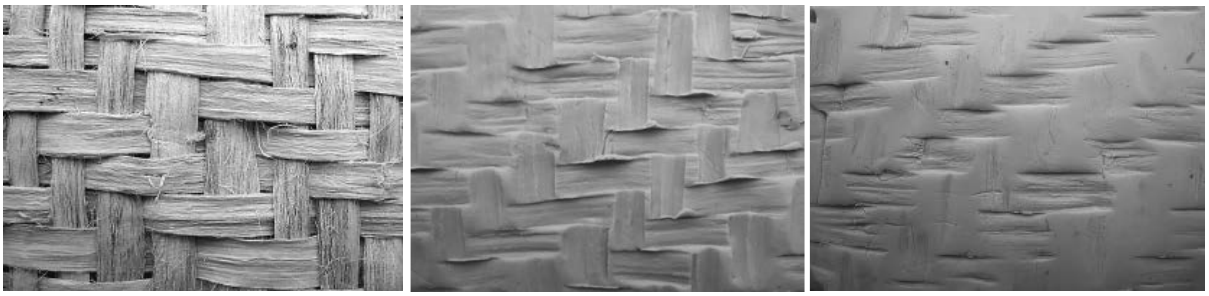
素材の形については、土器の表面の観察により表２の素材断面形や表３の編み目の形状、表



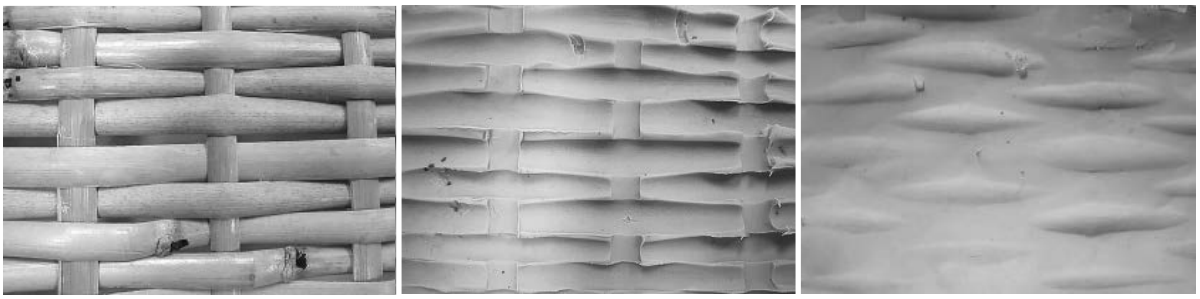
①ススキ皮製の網代編み　①の強い圧痕　①の弱い圧痕



②ススキ製の網代編み　②の強い圧痕　②の弱い圧痕



③フジ製の網代編み　③の強い圧痕　③の弱い圧痕



④ヤダケ製のござ目編み（外側）　④の強い圧痕　④の弱い圧痕

⑤ヤダケ製のござ目編み（内側）　⑤の強い圧痕　⑤の弱い圧痕

写真５　製作した編組製品とその圧痕

１や写真５から平材・半円材・円材の使用が確認された。今回の観察からは、「網代編み」で平材、「ござ目編み」で平材・半円材が多く使用されていたと考えられる。また、素材の厚さについては、「網代編み」、「ござ目編み」の違いからその差はあまり感じられなかった。ただ、その差がわかるのは、タテ・ヨコの編み目がわかる場合の圧痕の段差である。この差が大きい程厚みがあると言える。ここで注意したいのは、写真５の弱い圧痕の場合では、タテ・ヨコの編み目がハッキリしていないため、素材の厚みを判断することはできない。また、素材の厚さは、網代圧痕のタテ・ヨコ材の交差部分にできた段差から判断できる。

素材表面に見られる筋からは、細かいものが素材の繊維痕、太い筋が素材の割れであることが確認されている。素材の繊維痕からは、写真５－⑤強い圧痕のヤダケの繊維筋と同様である写真４－⑬（表２－29）をタケ・ササ類と判断した。また、表２－20・27・34も同様にタケ・ササ類と考えられる。この他、繊維の筋の痕跡が認められない写真４－②・⑦・⑧・⑭・⑮などは、素材の幅が１～５㎜と細い素材を使用した「ござ目編み」のもので、土器表面に見られる平材もしくは半丸材の平らな部分による鋭い編み目痕の状況、また素材幅が細く一定に揃えられ、真っ直ぐに割れる性質を持つ素材を考えるとタケ・ササ類にを使用したと考えたい。

最後に、今回の網代圧痕の観察からは、編組製品が素材の硬軟により編み方を変え、素材の特性を生かした編組技法で製作されていることが強く感じられた。また、「ござ目編み」の資料に硬質な素材のタケ・ササ類が多く使用されているようにも感じられた。このため、当時の縄文人は、身近にある加工が容易な素材を多く利用して編組製品を製作していたと考えられる。

４　おわりに

これまで、現在の編組製品の特徴や網代圧痕の情報、素材と編み方の関係から疑問に思ったことを確認するため、素材作りや編組製品の製作とその製品の実験を行ってきた。その結果、素材の同定まではできないものの、素材や編組技法、編組製品などから多くの特徴を観察することができた。しかし、網代圧痕の素材検討では、筆者の狭い視点から見たわずかな試みであるため、今後は、間接資料である網代圧痕の調査はもちろん、縄文時代の遺跡から出土した実物の編組製品の確認、素材のサンプル収集とその圧痕による確認など検討する課題は多いものと考えられる。

今回は、多くの編組製品を観察する機会が得られた。その中で、これらの製品が縄文時代の編組製品とほとんど変わらないことを実感した。また、編組製品からは、製作した職人たちの素晴らしい「手仕事」に気づかされ、改めて伝統工芸技術の重要性を感じた。今後は、このような「伝統の技」を、当館の教育普及活動で伝えていきたいと考えている。

＜註＞

（註１）本稿で述べる編組製品とは、「植物素材をタテ・ヨコ・ナナメに組んで立体・平面的につくりあげたもの」である。

（註２）荒屋敷遺跡の調査報告書（小柴吉男　1990　『荒屋敷遺跡Ⅱ』）の図版 140 を転載した。。

（註３）資料調査のため、生活工芸館１Ｆで展示販売している会津地域で製作された製品を実見させていただいた。資料閲覧に際し、多忙な中を対応していただいた同館館長の星保弘氏に、深くお礼申し上げます。

（註４）まほろんでは、団体来館者対応の体験メニューの中にある「昔の道具にさわってみよう」で使用するため、箕以外にも蓑、笠、背負い梯子などを所蔵する。

（註５）これまでに、ネガマリダケ製作の講習やマタタビ細工職人の実演見学、また、映像によるＮＨＫ「かごバック」『美の壺』、同「岩手　竹細工」『もういちど、日本』などを参考にして判断した。

（註６）本稿で使用する編組技法の名称は、大分県別府産業工芸試験所（1994　『竹編組技術資料』基礎技術編）による「基本編組」の名称を使用した。

（註７）縄文時代から出土したカゴ類の素材については、堀川久美子（2011　「日本における遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『植生史研究』第 20 巻第 1 号　日本植生史学会　「表２　遺跡出土のカゴ類・編物一覧表」）が、日本国内の事例を集成している。

（註８）縄文土器の焼成による収縮率については、後藤和民の報告（1980　『縄文土器をつくる』中公新書 132 頁）がある。

（註９）網代圧痕の重複については、秋田かな子（2006　『第 14 回　足元に眠る歴史展　縄文土器の作られ方―観察から見えてくること』東海大学校地内遺跡調査団　１－15 頁）が、「底面圧痕の重複は、製作途上の土器を敷物から持ち上げて再度置く再圧・再置に由来する」と述べている。

（註 10）松本　茂　1991　「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 11』福島県教育委員会

（註 11）山内幹夫　1985　「荒小路遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告 19』福島県教育委員会

（註 12）山岸英夫　1993　「仲ノ縄 B 遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 19』福島県教育委員会

（註 13）三浦武司　2002　「本町西 A 遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 32』福島県教育委員会

（註 14）阿部知己　2008　「小池田遺跡（１・２次）」『常磐自動車道遺跡調査報告 51』福島県教育委員会

（註 15）國井秀紀　2008　「石神遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 52』福島県教育委員会

（註 16）芳賀英一　1990　「胄宮西遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』福島県教育委員会

（註 17）松本　茂　1984　「柏久保遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』福島県教育委員会

（註 18）鈴鹿良一　1987　「羽白 D 遺跡（１次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ｘ』福島県教育委員会

（註 19）鈴鹿良一　1988　「羽白 D 遺跡（２次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ＸＩ』福島県教育委員会

（註 20）前掲載註 10 と同じ。

（註 21）山岸英夫　1990　「角間遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告８』福島県教育委員会

（註 22）山内幹夫　1996　「弓手原 A 遺跡（１次）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ｉ』福島県教育委員会

【写真出典】

・写真１…（註 2）より転載。

・写真２～５…筆者撮影。